

史跡

筑前国分寺跡



1999

太宰府市教育委員会

一．筑前国分寺の歴史

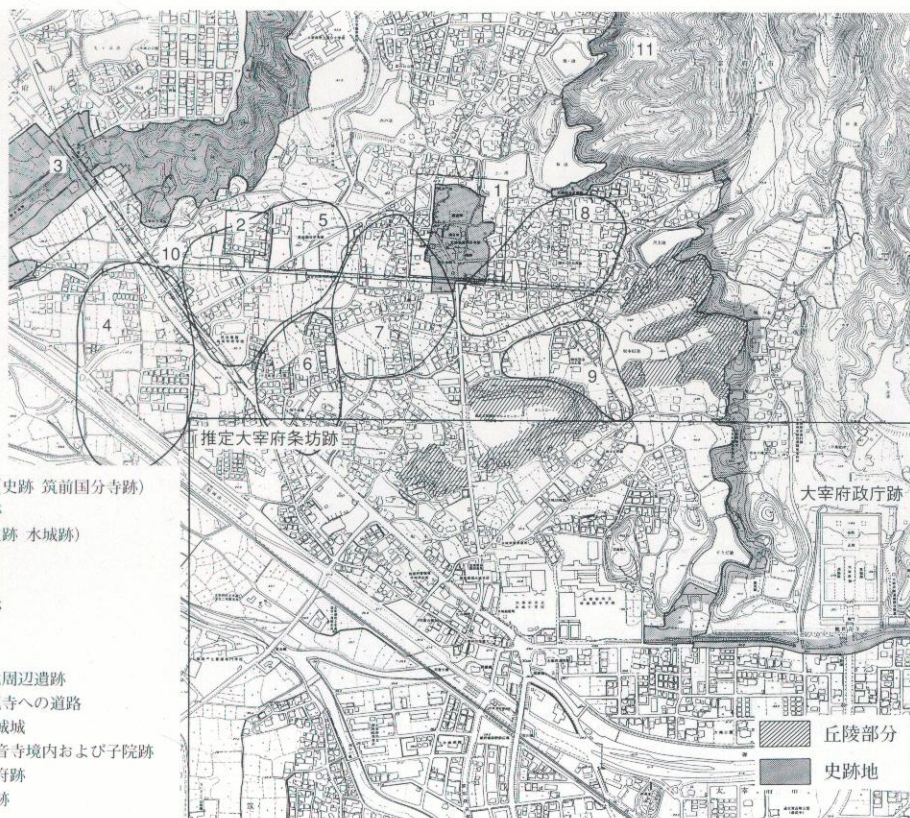
国分寺は、奈良時代に生じた国内外の不安定な情勢を鎮めることを願い、聖武天皇によって諸国六十ヶ国に置かれた寺です。ここ太宰府にある筑前国分寺もその一つで、正式には、「金光明四天王護国之寺」と言い、より所とした経典『金光明最勝王経』に由来しています。

天平九（737）年 諸国に釈迦仏像一体、挟持菩薩二体を造り、大般若経一部を写経することを命じる。（『続日本紀』天平九年三月丁丑条）

天平十二（740）年 国ごとに法華経十部の写経と七重塔建立を命じる。
（『続日本紀』天平十二年六月庚戌条）

天平十三（741）年 諸国に僧寺（金光明四天王護国之寺）、尼寺（法華滅罪之寺）を置くことを命じた。
（『類聚三代格』卷三 天平十三年二月十四日勅）





- 1 : 筑前国分寺跡 (史跡 筑前国分寺跡)
- 2 : 筑前国分尼寺跡
- 3 : 水城跡 (特別史跡 水城跡)
- 4 : 国分正坑遺跡
- 5 : 国分松本遺跡
- 6 : 国分千足町遺跡
- 7 : 国分川添遺跡
- 8 : 辻遺跡
- 9 : 御笠岡印出土地周辺遺跡
- 10 : 国分寺・国分尼寺への道路
- 11 : 特別史跡 大野城城
特別史跡 観世音寺境内および子院跡
特別史跡 大宰府跡
史跡 国分瓦窯跡

▼ 整備された筑前国分寺跡

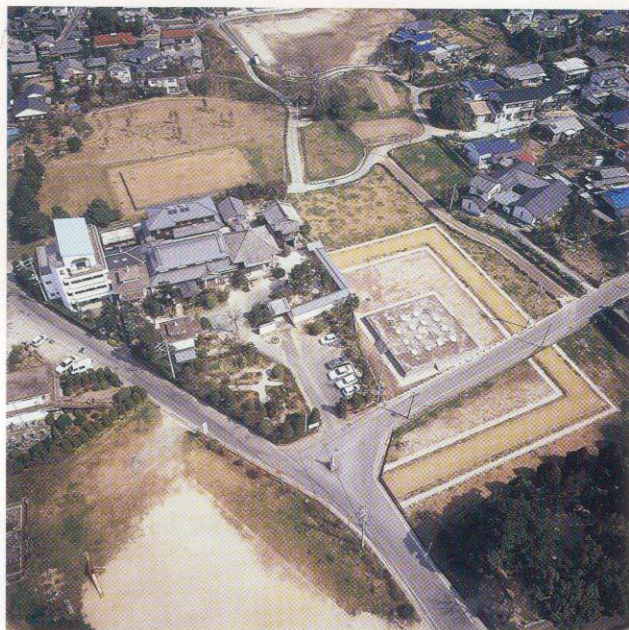
▲ 図1.筑前国分寺跡の環境
(アミ部分：史跡指定地)



二. 中枢伽藍

中枢伽藍とは、寺を形造る建物で、仏のいる場所（仏地）として金堂・塔があり、僧のいる場所（僧地）としての講堂があります。これらの建物の他に門や回廊があり、さらには経蔵、鐘楼もあったようです。筑前国分寺跡では、金堂・塔・講堂・回廊が見つかり、仏地（金堂・塔）と僧地（講堂）が回廊によって分けられた構造を取っています。

現在は、金堂を除く3つの建物の位置が復原されています。



◀ 整備復原された中枢伽藍

現在の国分寺本堂の下に当時の金堂跡が眠っています。

▼ 図2. 中枢伽藍および外郭施設の位置





▲ 塔跡 【九州歴史資料館】

金堂とともに、仏地を構成する中心的な建物です。調査によって、基壇化粧に瓦を用いる珍しい構造を持っていたことがわかっています。
現在、文化ふれあい館に復原模型が展示してあります。



▲ 講堂跡 【九州歴史資料館】

僧地を構成する礎石建物で、調査の結果、途中で1度建て替えられたものであったことがわかっています。
基壇は、塔と同じように瓦を用いて化粧されています。

三. 外郭施設

外郭施設とは、寺の範囲を示す施設で、言わば寺院地と集落を区画するものです。筑前国分寺跡では、南を築地塀によって、東西を板塀によって区画されていたことが分かりました。また北側については、未だ確証は得られていませんが、図6の4番と記した箇所¹に東西に走る小道があり、ここに北側の境界を示す施設がある可能性が残されています。



◀ 築地塀基壇の遺構 1



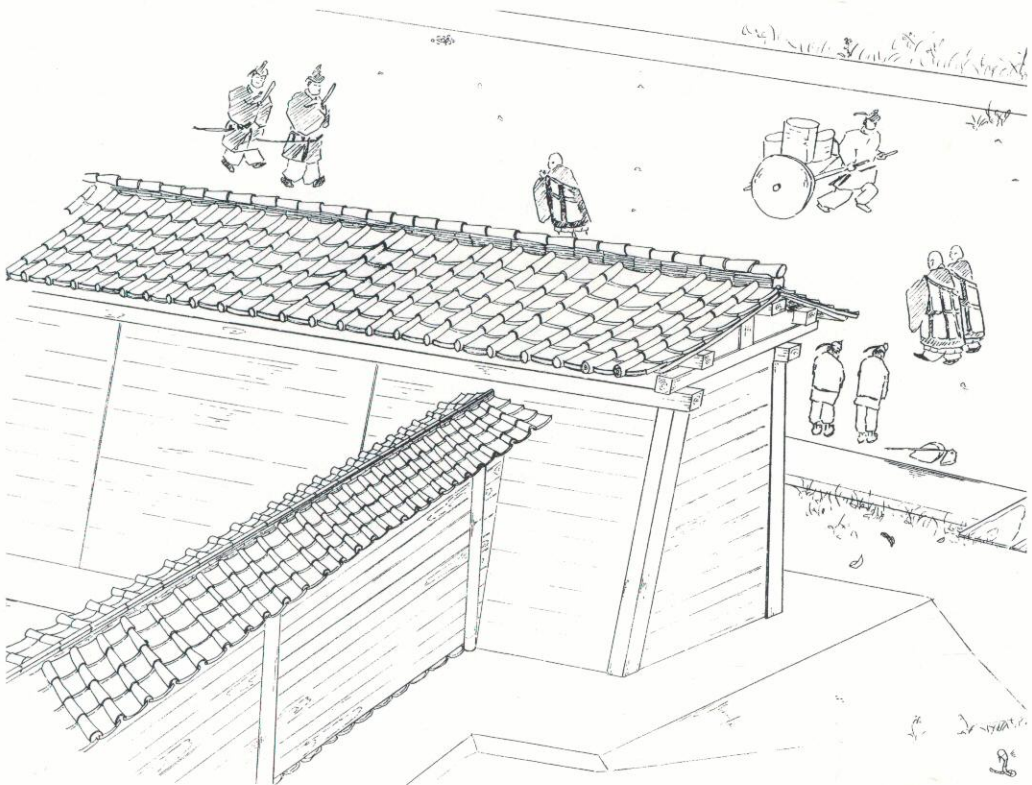
◀ 築地塀基壇の遺構 2



▲ 西外郭施設の遺構

[東西反転調査区の遺構写真を合成]

【(株) 写測エンジニアリング】



▲ 図3.南辺築地塀と西辺板塀の復原

四．国分寺の葺を飾る

瓦は藤原宮（694～710年）に葺かれるまでは寺院にしか用いられなかったもので、古代では瓦と寺院は深い結びつきがありました。軒先を飾る文様に蓮弁文が採用されていることから、このことが窺えます。

古代の屋根は本瓦葺きと呼ばれる葺き方で葺かれ、一つのお堂には数千枚もの瓦が用いられたと考えられていますから、五重塔や金堂、講堂などの複数の大きな建物が並ぶ寺院全体では、膨大な数の瓦を必要としたことがわかります。

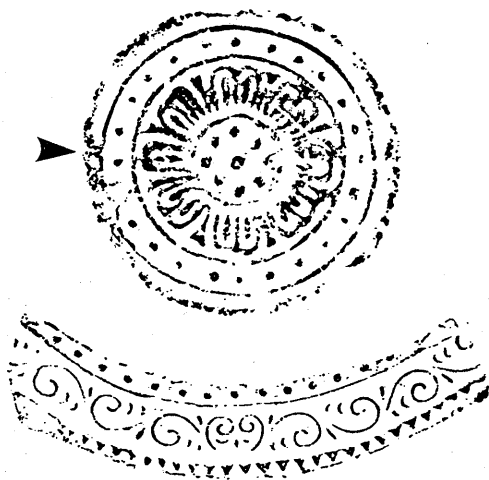
こうした瓦にはいろいろな種類がありますが、代表的なものと言えば軒先を飾る軒丸瓦と軒平瓦、そして四方を守護する鬼瓦ではないでしょうか。

筑前国分寺跡で出土する軒丸瓦の文様は複弁八葉蓮華文と呼ばれるもので、8枚の花弁が開いている蓮の花の様子を上から見たような文様です。これは全国の寺院や宮殿で使われた最もポピュラーな文様のひとつです。軒平瓦は均整唐草文と呼ばれるもので、中央にハート形が変形したような飾りを持ち、そこから両側に反転しながら派生する唐草を表現したものです。

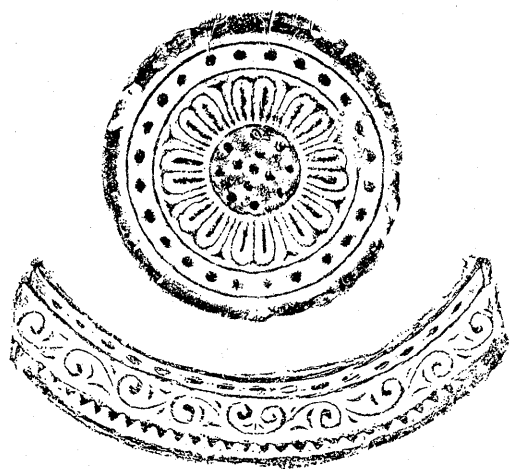
これらの文様と良く似たものは、大宰府政庁や鴻臚館に使われていたことが知られています。鴻臚館跡で早く発見されたことから鴻臚館式という名前で呼ばれることもあります。筑前国分寺跡から出土するものは純粋な鴻臚館式ではなく、大宰府政庁のものをモデルとして筑前国分寺専用に変えられたものなのです。（例えば図4の▲印部分等）

また鬼瓦は、政庁跡や水城跡、大野城跡から出土するものとおそらく同じ型から作られたものではないかと思われるものであり、筑前国分寺に使われた瓦はいずれも大宰府政庁と深い関係にあることを窺わせると言えます。

なお境内に隣接する太宰府市文化ふれあい館の屋根瓦は、筑前国分寺の軒丸瓦、軒平瓦の文様をそのまま用いたもので、当時の面影を伝えるものとなっています。



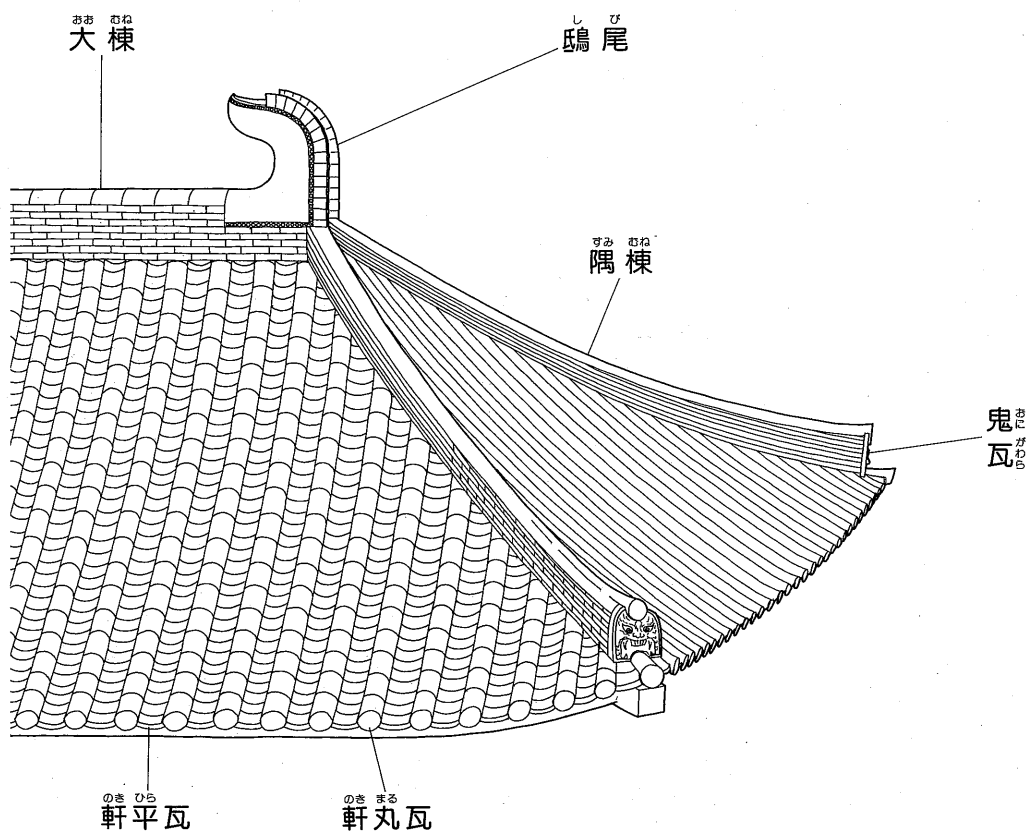
筑前国分寺の創建時に葺かれた軒瓦



大宰府政庁に葺かれた軒瓦

▲ 図4.筑前国分寺と大宰府政庁に葺かれた瓦

▼ 図5.屋根瓦の名称



五. 瓦窯

寺を形造る多くの建物の屋根に葺かれた膨大な数の瓦を焼いた窯の一つが、国分寺の北東にある筑前国分瓦窯跡です。調査では7基確認されましたがその内2基が現在史跡指定を受け現地に保存されています。溜池の中に保存されているため、窯本体を見学することは残念ながらできません。

この瓦窯は、残りの良いもので全長約19mを測り、あまり例の無い煉瓦を積む窯構造をとっていました。



▲ 中央が窯跡（史跡国分瓦窯跡）

▼ 煉瓦積みによる焚口（史跡国分瓦窯跡）



六. 筑前国分寺への道

寺を構成する伽藍が、全て南を向いていることから、国分寺へ行くための道路は南北に伸びる道路と考えられますが、筑前国分寺跡へは西の方から入ってくる道路が見つっています。これは、国分寺が持つもう一つの役目として、寺は国の華であり、好処（所）を占定することと決められていたことを考えると理解できます。現在筑前国分寺が建っている場所は、南側に低い丘陵があり決して南側からはよく見えません。しかし、奈良時代の国際港があった博多から水城を通して大宰府へ入った時、まず東にこの国分寺が目に入ったことでしょう。つまり諸外国の民に国華としての国分寺の威容を十分発揮し得る土地が



選ばれ、かつ大宰府への博多側からの入り口となる水城近くから進入路を取ったことと考えられます。また国分寺の西にある尼寺を含めて道路整備が為されたことも十分考え得ることです。

この道路は、二条の溝で道路として区画され、途中にある小川を版築工法という土を固める工法で堰止めて築かれた、東西に延びる直線道路でした。

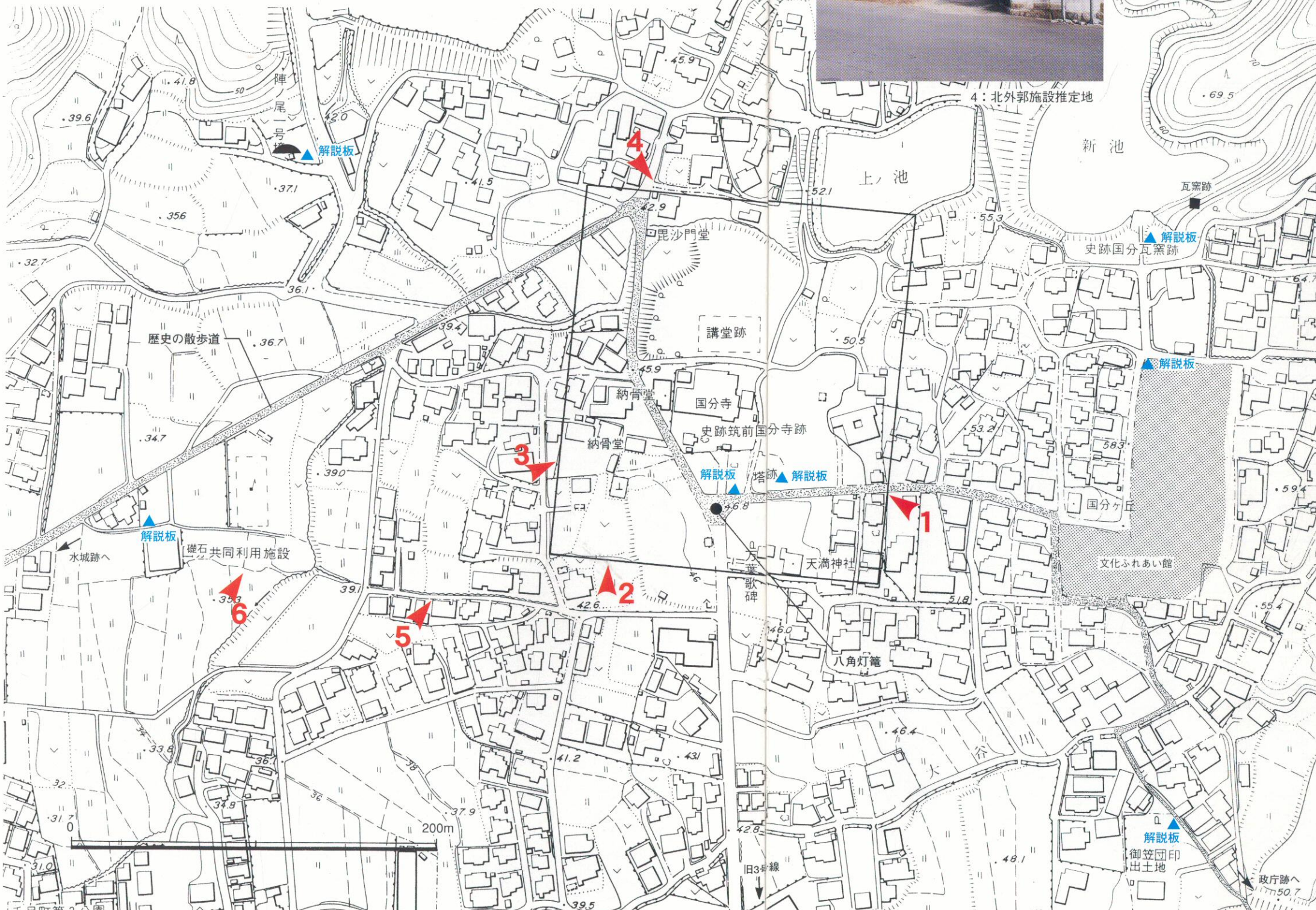
◀ 道路遺構（丘陵上が国分寺）



▲ 版築工法による道路

七. 筑前国分寺跡の見学（図6：現在の地形に見る国分寺の遺構）

筑前国分寺跡を形造っていた諸施設は、現在埋蔵文化財として地中下に保存されており、容易に見ることはできません。しかし、塔跡、講堂跡、回廊跡については、位置を示す地表表示によって見学することができます。また、外郭施設についても現在の畑の段差や小道、敷地境界等によって残っており、直接的な遺構をみることはできませんが、面影を垣間見ることができます。（外郭施設が観察できる土地は民有地になります、地域の方々への御配慮を御忘れないよう、お願いいたします。）



現在の地形に見る国分寺跡の遺構

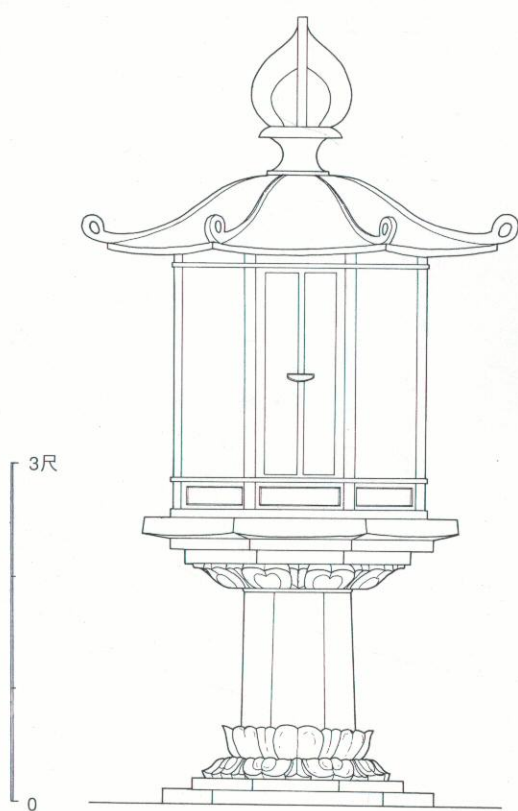
1. 国分寺東外郭施設
【見学ポイント】
○敷地境界
○道路の高低差
2. 国分寺南辺築地
【見学ポイント】
○畑の高低差
3. 国分寺西外郭施設
【見学ポイント】
○畑の境界
4. 国分寺北外郭施設（推定）
【見学ポイント】
○道路（小路）
- 5・6. 国分寺への道路
【見学ポイント】
○道路（5）
○水田敷地（6）
〔水田南北幅≒当時の道路幅〕

国分寺の景観

文化ふれあい館屋上から見学できます。
〔見学御希望の際は、ふれあい館1階総合受付まで、お申し出ください。〕

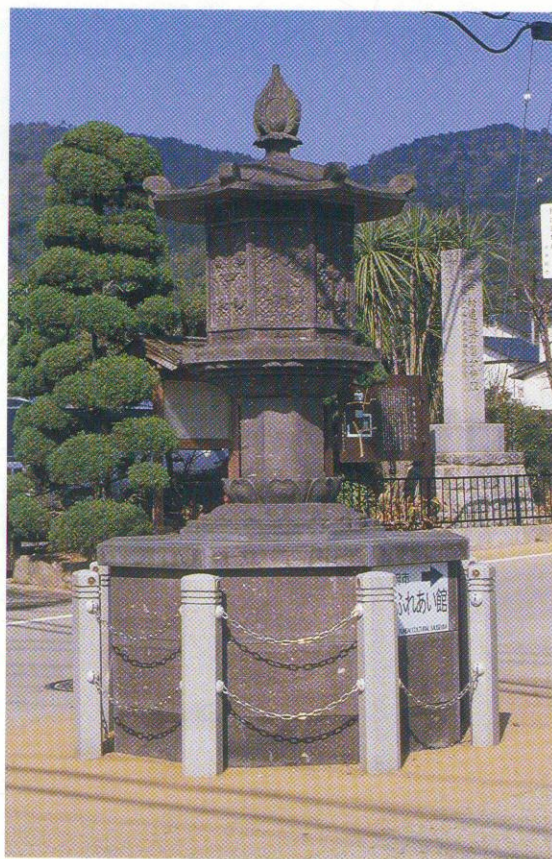
八. 国分寺前の石燈籠

現在の国分寺前面は三差路になっており、最近まで背の高い石碑が立っていましたが、改修に伴って石碑は境内に移転され、そのあとに何か目印になるものを立てるという計画が出てきました。そこでその場所が筑前国分寺金堂跡のほぼ正面にあたることから、それにゆかりあるものを置いてはどうかと考え、総国分寺として名高い奈良の東大寺金堂（大仏殿）の前にある銅燈籠をイメージしたものを建てることとしました。ただし素材は石とし、八女燈籠の職人さんに製作を依頼しました。銅で作られた細かな細工すべてを石に表現するのは困難ですから、新たに実測図を作成し、それに基づいて作成することとしました。石の色が黒茶色ですので、少々目立ちにくいという点も指摘されていますが、史跡地のなかで落ちついた雰囲気になっていると思うのは私だけでしょうか。



▲ 図7.石燈籠設計図（立面）

▼ 石燈籠



筑前国分寺跡が史跡指定されたのは古く、大正11年10月12日のことでした。これは九州内でも大隅国分寺跡に次ぐ古さで、早くから保存されてきました。

– 14 –

表紙解説 七重塔復原模型

太宰府市文化ふれあい館のふれあい広場にある七重塔は、筑前国分寺にかつて建立されていた塔の1/10サイズの復原模型です。

模型とは言え総高5.2m余りもあり、当時の壮大な風景が忍ばれるものとなりました。模型の素材はFRP（強化プラスチック）と呼ばれるもので、色彩はいわゆる古色と呼ばれる風化した色合いに仕上げており、細部を観察するとほのかに当初の色彩が窺えるようになっています。古色仕上げを採用した理由は、現在まで塔が建ち続けていたらおそらくこのような風景ではなかったかという想定で復原したことによります。結果として古都の風情とも呼べる落ちついた雰囲気を出しています。

執筆：中島恒次郎・狭川真一

編集：中島恒次郎

なお本誌作成にあたって下記の機関および諸氏に御援助頂きました。記して心より感謝申し上げます。

九州歴史資料館・横田賢次郎・石丸洋

筑前国分寺跡

目で見える太宰府市の文化財2

平成11年3月31日

編集 太宰府市教育委員会

発行 太宰府市観世音寺1丁目1番1号

印刷 システム・レコ